

小学校におけるハンドボールの教材作りに関する研究
—バスケットボールとの比較を通じて—

仲村 譲 (小学校課程・保健体育副専攻)

<序論> 研究動機・研究目的・研究方法

今度の新学習指導要領では、ハンドボールが小学校体育に導入されることとなった。ハンドボールは、ボール操作が容易であることなどの良さがあり戦術学習の教材として適していると思われる。しかし、教師にとってはハンドボールよりもバスケットボールの方が取り組みやすい傾向があるそこで、ハンドボールの教材としての良さを明らかにすることによって、これまで行われてきた戦術学習の教材に代わって、カリキュラムに取り入れられるきっかけとするために、この研究を進めるに至った。

本研究では、秋田大学教育文化学部附属小学校1年A組での仮説実験授業を質的研究の観点から分析し、授業実践について、ハンドボールの教材価値を明らかにすることを目的とした。その方法として、秋田大学附属小学校1年A組をハンドボール型ゲーム→バスケットボール型ゲーム(以下H→Bとする)の順で行う組と、バスケットボール型ゲーム→ハンドボール型ゲーム(以下B→Hとする)の順で行う組の2つの組にして行った授業を教科内容、教材、学習系統、教具、ゲーム形態の比較、の5つの観点から考察する。

<本論> 第一章 教材(教材化)とは何か

教材とは、学習内容を習得するための材料(手段)であり、常に指導目標達成のための媒体となるものである。教材化とは、運動財に手を加え、適切な教材にし、学習内容を習得しやすくすることである。

第二章 戦術学習について

戦術学習とは、頭の中で課題解決の手順を作り出し実際に運動を通して戦術課題を達成する手順を経て、有効な戦術行動を実現する学習である。

第三章 質的研究について

質的研究とは、研究者、実践者、子供が授業をどのように見ているのかという研究課題を明らかにする有効な研究方法の一つである。質的研究の意義は、量的研究では出来ない、内面的な動きの意味を読み取ることにある

第四章 秋田大学附属小学校での仮説実験授業

①単元名②仮説③児童の実態と準備状況④種目特性のとらえ方⑤教材化

におけるルールの工夫⑥ねらい⑦学習指導計画の7つの観点からまとめた。

第五章 秋田大学附属小学校での仮説実験授業の考察

(1)教科内容を「運動財に固有な内容」「運動財の違いを超える、類似、共通した一般的内容」の観点から考察した。

(2)この授業実践での教材は、「戦術学習の基礎」という位置づけにし「動きの形」をおぼえさせることによって、高学年につなげようとしている。

(3)基礎ゲーム→予備ゲーム→目標ゲームの学習系統で行うことにより、ボールゲームでの必要な技術、戦術を効果的に学ぶことができるようにしている。

(4)教具は、授業目標を達成するために選ばれるものである。この仮説授業では、児童の実態に合わせてボール、ゴールを使った。

(5)ボール操作については、ハンドボール型ゲームから始めた組のほうが、器用にこなせていた。また、ゲーム様相はハンドボール型ゲームから始めた組はダンゴ型になりにくかった。

<結論>

H→Bの組とB→Hの組とを比較することによって、授業実践について、ハンドボールの教材としての良さを明らかにすることを目的として行った。

その結果、H→Bの組はボール操作の容易なハンドボール型ゲームから始めたためB→Hよりもボール操作(投げるなど)がうまくできていた。また、ゲームの様相でもH→Bの組はゲーム様相の初期段階であるダンゴ型から早く抜け出すことができた。この二つの結果によってハンドボールが戦術学習の教材としての良さが明らかになったといえる。ハンドボール型ゲームもバスケットボール型ゲームもルール(行為的条件)は同じであったので、結果的に影響を与えたのはボールの大きさであると考えられる。

授業実践については、学習系統が大切であることがわかった。ボールゲームは技術・戦術が必要となるがそれだけに時間を割かれるべきではない。そのため、基礎ゲーム→予備ゲーム→目標ゲームの順での学習系統によって効果的に学ぶことができるような工夫が必要である。

本研究の課題としては、ボールだけがゲームに影響を与える形にならないように、正規のゲームのルールに出来るだけ近くし中学年、高学年で他の運動財との比較を行うことによって、ハンドボールの教材としての価値を更に明らかにする必要があるだろう。